

Anttalakkhaṇasuttaṃ

無我相經

Yadaniccaṃ taṃ dukkhaṃ yaṃ dukkhaṃ tadanattā

無常であるものは苦であり、苦であるものは無我である。

パーリ經典に登場するこの語句は多くの場合、次の語句に繋がる。

- 無我であるものは、「それは私のものではない、私はそれではない、それは私の我ではない」と、このようにありのままに、正しい智慧によって見るべきである。

そしてまた、多くの箇所では色(身体)についての問答がなされている。

- 「色(身体)は常住なのか、無常なのか」
「大徳よ、無常です」
「無常なるものは苦なのか、楽なのか」
「大徳よ、苦です」

この答えを得、次のように続けた。

「無常であり、苦であり、自然に変化して壊れゆくものを、それは私のものである、私はそれである、それは私の我であると見なすことは正しいのか」と。

ここで説かれている三相(無常、苦、無我)の特徴とは ……………

それぞれに関連し合い、関係が継続し、同じ事柄の中に相反する性質があり、互いに因となり果になることである。つまり、これら異なった状態にある種々様々な構成要素が集まり合って生じ、存続し、壊滅する、とこの様に要約することができる。

この関係の全体性にある法(dhamma)のプロセスは次の状態において示せる。

無常性(aniccatā)－すべての構成要素が生じて滅する状態、あるいは、法の生成プロセスに常態はない。

苦性(dukkhatā)－生じては滅する事象によって、すべての構成要素、あるいは、すべての法の生成プロセスは抑圧を受けて変懷し、不安定になり元の状態に留まることができない。

無我性(anattatā)－すべての構成要素が集まって生じた状態にあっては因縁に随順することになり、核となって永続的に統制する実体の存在はない。

これら三相を現象世界を構成する共通項として捉えれば、「自我」と一般的に呼ばれるものが、すき間なく詰め込まれた様々な構成要素の集まりであることが理解できる。

それら構成要素は、それぞれが生じつつ滅してゆき、ことごとく壊滅してしまうので永続することができない。圧迫や軋轢があることでその状態は変化し、ばらばらに分散してしまい安定することがない。そこでは、因縁、すなわち関係の全体性が流動的状況のあり方を方向付ける法のプロセスとなるのである。

実体となるものは何もなく、すべて因縁に従うだけであり、何人も個我なるものの望みを叶えることはできないのである。

P.A.Payuttō 仏法(タイ語版) pp.82-83

Phra Mahāpungnyō 訳

Anttalakkhaṇasuttaṃ

Namo tassa bhagavato arahato
sammāsambuddhassa. (3 times)

Evamme suttaṃ ekaṃ samayaṃ bhagavā
bārāṇasiyaṃ viharati isipatane migadāye.
Tatra kho bhagavā pañcavaggiye
bhikkhū āmantesi ※

“Rūpaṃ, bhikkhave, anattā. Rūpañca idaṃ,
bhikkhave, attā abhavissa, nayidaṃ rūpaṃ
ābādhāya saṃvatteyya, labbhettha ca rūpe –
‘evaṃ me rūpaṃ hotu, evaṃ me rūpaṃ mā ahoṣī’ ti.
Yasmā ca kho, bhikkhave, rūpaṃ anattā, tasmā
rūpaṃ ābādhāya saṃvattati, na ca labbhati rūpe –
‘evaṃ me rūpaṃ hotu, evaṃ me rūpaṃ mā
ahoṣī’ ” ti

※ “bhikkhavo” ti. “Bhadante” ti te bhikkhū bhagavato
paccassosum. Bhagavā etadavoca –

阿羅漢であり正自覺者であるかの世尊を
私は礼拝いたします。

私はこのように聞きました。

ある時、世尊はベナレスの、昔仙人が降りて来た所
であると伝えられた、鹿野園に住んでおられました。
そこで世尊は五人の比丘に、「比丘たちよ」と話し
かけられました。

比丘たちよ、色は無我である。比丘たちよ、もし色が
我であるならば、色は病にかかることはないし、また
色に対して『私の色はこのようになれ、私の色はこの
ようになるな』と命じることが出来るであろう。
しかし比丘たちよ、実に色は無我であるから色は病い
にかかり、また色に対して『私の色はこのようになれ、
私の色はこのようになれ』と命じることが出来ない
のである。

— 音声ファイルではこの箇所が省略されている。

彼らが「尊師よ」と世尊に答えると、世尊は次のように
説かれました。

“Vedanā anattā. Vedanā ca hidam, bhikkhave, attā abhavissa, nayidam vedanā ābādhāya samvatteyya, labbhettha ca vedanāya – ‘evaṃ me vedanā hotu, evaṃ me vedanā mā ahoṣī’ti. Yasmā ca kho, bhikkhave, vedanā anattā, tasmā vedanā ābādhāya samvattati, na ca labbhati vedanāya – ‘evaṃ me vedanā hotu, evaṃ me vedanā mā ahoṣī’”ti.

“Saññā anatta. Saññā ca hidam, bhikkhave, attā abhavissa, nayidam saññā ābādhāya samvatteyya, labbhettha ca saññāya – ‘evaṃ me saññā hotu, evaṃ me saññā mā ahoṣī’ti. Yasmā ca kho, bhikkhave, saññā anattā, tasmā saññā ābādhāya samvattati, na ca labbhati saññāya – ‘evaṃ me saññā hotu, evaṃ me saññā mā ahoṣī’”ti.

“Saṅkhārā anattā. Saṅkhārā ca hidam, bhikkhave, attā abhavissamsu, nayidam saṅkhārā ābādhāya samvatteyyum, labbhettha ca saṅkhāresu

受は無我である。比丘たちよ、もし受が我であるならば、受は病にかかることはないし、また受に対して『私の受はこのようになれ、私の受はこのようになるな』と命じることが出来るであろう。

しかし比丘たちよ、実に受は無我であるから受は病いにかかり、また受に対して『私の受はこのようになれ、私の受はこのようになるな』と命じることが出来ないのである。

想は無我である。比丘たちよ、もし想が我であるならば、想は病にかかることはないし、また想に対して『私の想はこのようになれ、私の想はこのようになるな』と命じることが出来るであろう。

しかし比丘たちよ、実に想は無我であるから想は病いにかかり、また想に対して『私の想はこのようになれ、私の想はこのようになるな』と命じることが出来ないのである。

行は無我である。比丘たちよ、もし行が我であるならば、行は病にかかることはないし、また行に対して

‘evaṃ me saṅkhārā hontu, evaṃ me saṅkhārā mā ahesu’nti. Yaśmā ca kho, bhikkhave, saṅkhārā anattā, tasmā saṅkhārā ābādhāya saṃvattanti, na ca labbhati saṅkhāresu – ‘evaṃ me saṅkhārā hontu, evaṃ me saṅkhārā mā ahesu’”nti.

“Viññāṇaṃ anattā. Viññāṇaṇca idaṃ, bhikkhave, attā abhavissa, nayidaṃ viññāṇaṃ ābādhāya saṃvatteyya, labbhettha ca viññāṇe – ‘evaṃ me viññāṇaṃ hotu, evaṃ me viññāṇaṃ mā ahoṣī’ti. Yaśmā ca kho, bhikkhave, viññāṇaṃ anattā, tasmā viññāṇaṃ ābādhāya saṃvattati, na ca labbhati viññāṇe – ‘evaṃ me viññāṇaṃ hotu, evaṃ me viññāṇaṃ mā ahoṣī’”ti.

“Taṃ kiṃ maññatha, bhikkhave, rūpaṃ niccaṃ vā aniccaṃ vā”ti?

“Aniccaṃ, bhante”.

“Yaṃ paṇāniccaṃ dukkhaṃ vā taṃ sukhaṃ vā”ti?

“Dukkhaṃ, bhante”.

『私の行はこのようになれ、私の行はこのようになるな』と命じることが出来るであろう。

しかし比丘たちよ、実に行は無我であるから行は病いにかかり、また行に対して『私の行はこのようになれ、私の行はこのようになるな』と命じることが出来ないのである。

識は無我である。比丘たちよ、もし識が我であるならば、識は病にかかることはないし、また識に対して『私の識はこのようになれ、私の識はこのようになるな』と命じることが出来るであろう。

しかし比丘たちよ、実に識は無我であるから識は病いにかかり、また識に対して『私の識はこのようになれ、私の識はこのようになるな』と命じることが出来ないのである。

「比丘たちよ、そなたらはどう思うか。色は常であるか無常であるか。」

「無常であります。」

「無常なるものは苦であるか、楽であるか。」

「苦であります。」

“Yaṃ paṇāniccaṃ dukkhaṃ vipariṇāmadhammaṃ,
kallaṃ nu taṃ samanupassitum – ‘etaṃ mama,
esohamasmi, eso me attā’”ti?
“No hetam, bhante”.

“Taṃ kiṃ maññatha, bhikkhave, vedanā niccaṃ vā
aniccaṃ vā”ti?
“Aniccaṃ, bhante”.
“Yaṃ paṇāniccaṃ dukkhaṃ vā taṃ sukhaṃ vā”ti?
“Dukkhaṃ, bhante”.
“Yaṃ paṇāniccaṃ dukkhaṃ vipariṇāmadhammaṃ,
kallaṃ nu taṃ samanupassitum – ‘etaṃ mama,
esohamasmi, eso me attā’”ti?
“No hetam, bhante”.

“Taṃ kiṃ maññatha, bhikkhave, saññā niccaṃ vā
aniccaṃ vā”ti?
“Aniccaṃ, bhante”.
“Yaṃ paṇāniccaṃ dukkhaṃ vā taṃ sukhaṃ vā”ti?
“Dukkhaṃ, bhante”.

「無常であり、苦であり、壊れるものを『これは私の
ものである、これは私である、これは私の我である』
と見るのは正しいか。」
「尊師よ、それは正しくありません。」

「比丘たちよ、そなたらはどう思うか。受は常であるか
無常であるか。」
「無常であります。」
「無常なるものは苦であるか、楽であるか。」
「苦であります。」
「無常であり、苦であり、壊れるものを『これは私の
ものである、これは私である、これは私の我である』
と見るのは正しいか。」
「尊師よ、それは正しくありません。」

「比丘たちよ、そなたらはどう思うか。想は常であるか
無常であるか。」
「無常であります。」
「無常なるものは苦であるか、楽であるか。」
「苦であります。」

“Yaṃ paṇāniccaṃ dukkhaṃ
vipariṇāmadhammaṃ, kallaṃ nu taṃ
samanupassitum – ‘etaṃ mama, esohamasmi, eso
me attā’”ti?
“No hetam, bhante”.

“Taṃ kiṃ maññatha, bhikkhave, saṅkhārā niccaṃ
vā aniccaṃ vā”ti?
“Aniccaṃ, bhante”.
“Yaṃ paṇāniccaṃ dukkhaṃ vā taṃ sukhaṃ vā”ti?
“Dukkhaṃ, bhante”.
“Yaṃ paṇāniccaṃ dukkhaṃ vipariṇāmadhammaṃ,
kallaṃ nu taṃ samanupassitum – ‘etaṃ mama,
esohamasmi, eso me attā’”ti?
“No hetam, bhante”.

“Taṃ kiṃ maññatha, bhikkhave, viññāṇaṃ niccaṃ
vā aniccaṃ vā”ti?
“Aniccaṃ, bhante”.
“Yaṃ paṇāniccaṃ dukkhaṃ vā taṃ sukhaṃ vā”ti?
“Dukkhaṃ, bhante”

「無常であり、苦であり、壊れるものを『これは私の
ものである、これは私である、これは私の我である』
と見るのは正しいか。」
「尊師よ、それは正しくありません。」

「比丘たちよ、そなたらはどう思うか。行は常であるか
無常であるか。」
「無常であります。」
「無常なるものは苦であるか、楽であるか。」
「苦であります。」
「無常であり、苦であり、壊れるものを『これは私の
ものである、これは私である、これは私の我である』
と見るのは正しいか。」
「尊師よ、それは正しくありません。」

「比丘たちよ、そなたらはどう思うか。識は常であるか
無常であるか。」
「無常であります。」
「無常なるものは苦であるか、楽であるか。」
「苦であります。」

“Yaṃ paṇāniccaṃ dukkhaṃ
vipariṇāmadhammaṃ, kallaṃ nu taṃ
samanupassitum – ‘etaṃ mama, esohamasmi, eso
me attā’”ti?
“No hetam, bhante”.

“Tasmātiha, bhikkhave, yaṃ kiñci rūpaṃ
atītānāgatapaccuppannaṃ ajjhattaṃ vā bahiddhā vā
oḷārikaṃ vā sukhumaṃ vā hīnaṃ vā paṇītaṃ vā
yaṃ dūre santike vā, sabbam rūpaṃ – ‘netam
mama, nesohamasmi, na meso attā’ti evametam
yathābhūtaṃ sammappaññāya daṭṭhabbam.

“Yā kāci vedanā atītānāgatapaccuppannaṃ
ajjhattā vā bahiddhā vā oḷārikaṃ vā sukhumaṃ vā
hīnaṃ vā paṇītaṃ vā yā dūre santike vā, sabbā
vedanā – ‘netam mama, nesohamasmi, na meso
attā’ti evametam yathābhūtaṃ sammappaññāya
daṭṭhabbam.

「無常であり、苦であり、壊れるものを『これは私の
ものである、これは私である、これは私の我である』
と見るのは正しいか。」

「尊師よ、それは正しくありません。」

比丘たちよ、それゆえ、色であるものは何であれ、
過去のものでも、未来のものでも、現在のもので
も、内部のものでも、外部のものでも、粗いもので
も、細かいものでも、劣ったものでも、優れたもの
でも、遠いものでも近いものでも、そのすべての色
を『これは私のものではない、これは私ではない、
これは私の我ではない』とこのようにあるがままに
正しい智慧によって見るべきである。

受であるものは何であれ、過去のものでも、未来の
ものでも、現在のものでも、内部のものでも、外部
のものでも、粗いものでも、細かいものでも、劣っ
たものでも、優れたものでも、遠いものでも、近い
ものでも、そのすべての受を『これは私のものでは
ない、これは私ではない、これは私の我ではな
い』とこのようにあるがままに正しい智慧によっ
て見るべきである。

“ Yā kāci saññā atītānāgatapaccuppannaṃ
ajjhataṃ vā bahiddhā vā oḷārikaṃ vā sukhumaṃ vā
hīnaṃ vā paṇītaṃ vā yā dūre santike vā, sabbā
saññā – ‘netam mama, nesohamasmi, na meso
attā’ ti evametam yathābhūtaṃ sammappaññāya
daṭṭhabbam.

“ Yā kāci saṅkhārā atītānāgatapaccuppannaṃ
ajjhataṃ vā bahiddhā vā oḷārikaṃ vā sukhumaṃ vā
hīnaṃ vā paṇītaṃ vā yā dūre santike vā, sabbā
saṅkhārā – ‘netam mama, nesohamasmi, na meso
attā’ ti evametam yathābhūtaṃ sammappaññāya
daṭṭhabbam.

“ Yaṃ kiñci viññāṇaṃ atītānāgatapaccuppannaṃ
ajjhataṃ vā bahiddhā vā oḷārikaṃ vā sukhumaṃ vā
hīnaṃ vā paṇītaṃ vā yā dūre santike vā, sabbam
viññāṇaṃ – ‘netam mama, nesohamasmi, na meso
attā’ ti evametam yathābhūtaṃ sammappaññāya
daṭṭhabbam.

想であるものは何であれ、過去のものでも、未来の
ものでも、現在のものでも、内部のものでも、外
部のものでも、粗いものでも、細かいものでも、
劣ったものでも、優れたものでも、遠いもので
も、近いものでも、そのすべての想を『これは私の
ものではない、これは私ではない、これは私の我
ではない』とこのようにあるがまさに正しい智慧
によって見るべきである。

行であるものは何であれ、過去のものでも、未来の
ものでも、現在のものでも、内部のものでも、外部
のものでも、粗いものでも、細かいものでも、劣っ
たものでも、優れたものでも、遠いものでも、近い
ものでも、そのすべての行を『これは私のものでは
ない、これは私ではない、これは私の我ではな
い』とこのようにあるがまさに正しい智慧によっ
て見るべきである。

識であるものは何であれ、過去のものでも、未来の
ものでも、現在のものでも、内部のものでも、外部
のものでも、粗いものでも、細かいものでも、劣っ
たものでも、優れたものでも、遠いものでも、近い
ものでも、そのすべての識を『これは私のものでは
ない、これは私ではない、これは私の我ではな
い』とこのようにあるがまさに正しい智慧によっ
て見るべきである。

“Evaṃ passaṃ, bhikkhave, sutavā ariyasāvako rūpasmimpi nibbindati, vedanāyapi nibbindati, saññāyapi nibbindati, saṅkhāresupi nibbindati, viññāṇasmimpi nibbindati. Nibbindaṃ virajjati; virāgā vimuccati. Vimuttasmiṃ vimuttamiti ñāṇaṃ hoti. ‘Khīṇā jāti, vusitaṃ brahmacariyaṃ, kataṃ karaṇīyaṃ, nāparaṃ itthattāyā’ti pajānātī’”ti.

Idamavoca bhagavā. Attamaṇā pañcavaggiyā bhikkhū bhagavato bhāsitaṃ abhinandun

Imasmiṇca pana veyyākaraṇasmiṃ bhaññaṃāne pañcavaggiyānaṃ bhikkhūnaṃ anupādāya āsavehi cittāni vimuccim

比丘たちよ、このように見ると、多聞の聖なる弟子は、色をも厭離し、受をも厭離し、想をも厭離し、行をも厭離し、識をも厭離する。厭離のゆえに貪りを離れる。貪りを離れるゆえに解脱する。解脱すれば、『解脱した』という智慧が生じる。『生まれることはもう無い。修行は完成した。(道のために)為すべきことはすでに為し、この道のために他に為すべきことはない、あるいは、二度とこのような生存を受けることはない』と知るのである。』と。

世尊がこれを説かれると、五人の比丘は世尊の教説を心から喜んで受けました。

この教説が説かれてるうちに、五人の比丘は心に執着がなくなり、漏より解脱したのでした。

和訳文 ウ、ウェーブツラ長老『基本聖典』P.75-P.79
中山書房仏書林（転載許可取得済）

心を死をまったく恐れないものとするのを可能にするのは正見のはたらきであり、それは 真理の最高レベルに至る世間を超えた智慧となり、無常、苦、無我を見定め、さらに空性を明瞭に理解させるものともなります。

身体と心の無我を知ることは、不変で固有のものはないことを知らしめることになり、そこにあるものは 名法(nāmadhamma 心)と色法(rūpadhamma 身体)が対となる自然状況だけであって、これもまた同様に実体とされるものではないのです。

つまり、この命はその因(hetu)と縁(paccaya)が尽きるまで流動を続ける自然状況の中のひとつの流れ、としてあるだけなのです。

人が生まれ、人が死ぬ、と解釈することは上記の意味においては誤解であり、心のはたらきの瞬間的な生滅さえも、高いレベルから見ればその人の生死に関わりなく存在しているのであり、因と縁の形成作用がある心の、あたりまえで自然な流転があるだけなのです。

このように空性を正しく見て知る人にとって、人は生まれることもなく死ぬこともない、ということになるのです。

空性を見るということは、心と身体、そしてすべてのものは、その固有の実体がまったく空虚なものであることを知る、ということです。

生じたものは何もなく、最初から誰も生まれて来ていないのに、誰がどのようにして死ぬことができるのでしょうか。

だから、死というものは無い、とこのように見ることは死の意味を無意味とするだけではなく、生滅を繰り返す心が存在するという意味さえも同様に無意味なものとするのです。

私が考える、私が思う、私が嬉しい、私が苦しい、などといった執心を持つことのない者に 訪れて来る死があるのでしょうか。

空性を見るということは、私の自我も誰の自我も無く、ただ自然状況が流れ行くだけであると了知することであり、そこには 私が生じ、存在し、消滅する、といった事に執著した思いや捉^{とら}われはないのです。

つまり、空性を正しく知る心にとって死は存在しないのです。

プッタタート比丘『死の前の死』(タイ語表題 ตายก่อนตาย) p.32 から p.36

Phra Mahāpungnyō 訳